

齊加尚代さん「JCJ 大賞」

写真は映画「教育と愛国」で日本ジャーナリスト JCJ 大賞を受賞した齊加尚代さん。東海大学の JPOT が取材・編集した冊子から、映画などを紹介したい。

日本は今、教育と学問が政治介入によって大きな危機を迎えています。5年前に放送したテレビドキュメンタリー「教育と愛国」に追加取材し、映画にしたのはその危機感からです。取材をしながら、公教育が戦前の状態に近づいているのではないかと感じてきました。この映画は、教育現場から見た小さな変化を数珠繋ぎにして完成させたものです。



2010 年大阪維新の会が結成されて以降、教育関連条例が次々と可決されていきました。政治主導のその改革は、「自由」という価値と逆の改革で、先生たちを条例やルールで縛っていくという流れができていきました。

2012 年 2 月には大阪で教育再生民間タウンミーティングが開催され、大阪府知事の松井一郎さんと、安倍晋三さんが硬く握手を交わしました。安倍さんは「政治が教育にタッチするのは当然だ」と宣言されました。この年の 12 月に第 2 次安倍政権が誕生してから 10 年、日本社会の壊れ方が深刻だと感じます。

一昨年は、菅前首相の日本学術会議任命拒否の問題が私の心に火をつけ、「絶対に映画にするぞ」と自分に発破を掛けました。しかし昨年、検定済みの教科書が閣議決定によって書き換えられるという事態になりました。政府見解に基づいて、歴史の用語を教科書から消すという直接介入です。

教科書は子どもたちが手にする最初の学術の書です。学術が歪められてしまえば、教科書も変質していきます。戦後、自由を取り戻すために国定教科書が廃止されたのに、現在の教科書検定制度は忖度と圧力の世界になってしまっています。ある先生がこの映画を見て「自分の苦しみの原因が、映画の中に描かれている」と言い、私は胸が詰まりました。子どもに向き合い、事実を教える先生にバッシングが向けられる様子を描いたのも、政治の力で教育現場が歪められる怖さを伝えたかったからです。そして、教育現場で息苦しさを感じている先生たちの姿が「伝えなければならない」という原動力でもありました。

政治介入によって教育の自由が奪われる。その行為は社会そのものから自由を奪いかねません。そして、子どもが主体的に学ぶ大切な学習権を大人の責任で守らなければなりません。

(2023 年 4 月 3 日)